日上小深田遺跡

2000

津山市教育委員会

日上小深田遺跡

2000

津山市教育委員会

日上小深田遺跡遠景(西から)

日上小深田遺跡全景

序

日上小深田遺跡は、吉井川沿いの河岸段丘上に位置する遺跡で、日上西地区の土地改良総合整備事業に伴って実施された分布調査によってその存在が確認されました。東方の畝山丘陵には、美作を代表する前期古墳である日上天王山古墳や、「古式群集墳」として知られる日上畝山古墳群などがあり、さらに東方には美作国分寺、国分尼寺が造営されており、この地域において数多くの遺跡が形成されてきたことが分かります。

今回の発掘調査では、弥生時代の住居や建物の跡や、奈良時代の道路の側溝と思われる溝などがみつかりました。これらの成果は、これまで不明であった日上地域における集落の実態を明らかにするとともに、古代における道路を復元する一助となるものと思われます。

終わりになりましたが、調査にあたって多大なるご協力とご理解をいただいた地元関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

平成12年３月31日

津山市教育委員会
教育長　松尾　康義

例　言

1．本書は日上西地区基盤整備促進事業の実施に伴う日上小深田（ひかみこぶかた）遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査経費は、確認調査については国庫補助金を得て、発掘調査については調査費用の80％を事業主である自井手土地改良区が、20％を津山市が負担して実施した。

3．確認調査は津山市教育委員会・津山弥生の里文化財センター行田裕美、坂本心平が、発掘調査は安川豊史、川村雪絵が担当した。

4．本書の執筆は安川、川村が担当し、編集は川村がおこなった。執筆分担は次のとおりである。
第Ⅰ章、第Ⅱ章－１……安川　　第Ⅱ章－２・３、第Ⅲ章、第Ⅳ章……川村

5．本書に用いたレベル高は海抜高である。また、方位は平面直角座標系第Ⅴ系の北である。

6．本書第１図に使用した「日上小深田遺跡と周辺の遺跡分布図」は建設省国土地理院発行２万５千分の１（津山東部）を複製したものである。

7．本書には本文及び挿図などに遺構の略称を用いている。略称は次のとおりである。
ＳＨ：住居跡　ＳＢ：建物跡　ＳＤ：溝　ＳＫ：土坑

8．発掘調査の実施にあったては、事業主である自井手土地改良区理事長　原田武蔵氏の御協力をいただいた。また、発掘作業については津山市シルバー人材センター、遺物整理及び報告書作成には野上恭子、岩木えり子、家元弘子、山本有希、上原香里、三谷順子、仁木智子、上原恵美各諸氏の協力を得た。

9．出土遺物及び図面類は津山弥生の里文化財センター（津山市沼600－１）に保管している。

本 文 目 次

Ⅰ　遺跡の位置と周辺の遺跡……1
　1．遺跡の位置……1
　2．周辺の遺跡……1
Ⅱ　調査の経過……4
　1．調査に至る経過……4
　2．調査経過……4
　3．調査体制……6
Ⅲ　調査の記録……7
　1．確認調査の記録……7
　（1）高位段丘部分（T－1～17）……7
　（2）低位段丘部分（T－18～23）……10
　（3）自然堤防部分（T－24～28）……10
　（4）試掘調査のまとめ……13
　2．発掘調査の記録……13
　（1）A地区の調査……13
　（2）B地区の調査……18
　（3）C地区の調査……21
Ⅳ　まとめ……22

挿 図 目 次

巻頭図版　日上小深田遺跡遠景・日上小深田遺跡全景
第1図　日上小深田遺跡と周辺の遺跡分布図……2
第2図　日上小深田遺跡トレンチ配置図……5
第3図　確認調査トレンチ平面・断面図（1）……8
第4図　確認調査トレンチ平面・断面図（2）……9
第5図　確認調査出土遺物実測図……11
第6図　日上小深田遺跡発掘調査区平面図……12
第7図　A地区SB1平面・断面図……13
第8図　A地区SD1～3平面・断面図……14
第9図　A地区SD2出土土器実測図……15
第10図　A地区SK1～6平面・断面図……16
第11図　B地区SH1、SD1～4平面・断面図……17
第12図　B地区SH1出土土器実測図……18
第13図　B地区SD1出土土器実測図……18
第14図　B地区SK1～4平面・断面図……19
第15図　B地区SK1出土石器実測図……20
第16図　B地区P21出土土器実測図……20
第17図　B地区遺物包含層出土土器実測図……21
第18図　C地区トレンチ、SB1平面・断面図……21
第19図　B地区SD1・C地区落ち込みの位置関係……22

図 版 目 次

図版1　1.T－3（北から）　2.T－6（北から）　3.T－11（南から）　4.T－12（南から）
　5.T－14（南から）　6.T－15（南から）　7.T－16（南から）　8.T－3平瓦出土状況（南から）
　9.T－6土器出土状況（東から）
図版2　1.A地区北半部　2.A地区南半部　3.B地区全景　4.C地区全景
図版3　1.A地区SD1・2（北東から）　2.B地区SH1（北西から）　3.B地区SD1（南東から）
図版4　1.A地区調査前（北から）　2.A地区SD3（北から）　3.A地区SK1（南東から）
　4.A地区SK2（東から）　5.A地区SK3（南西から）　6.A地区SK4（北から）
　7.A地区SK5（南から）　8.A地区SK6（北東から）
図版5　1.A地区SK6断面（北西から）　2.B地区調査前（北から）　3.B地区SD2～4付近（西から）
　4.B地区SK1（北西から）　5.B地区SK3（南から）　6.B地区SK4（西から）
　7.C地区調査前（南西から）　8.C地区全景（南西から）
図版6　1.C地区落ち込み部分　2.現地説明会
図版7　確認調査出土遺物
図版8　発掘調査出土遺物

Ⅰ　遺跡の位置と周辺の遺跡

1．遺跡の位置

日上小深田（ひかみ・こぶかた）遺跡は、津山市街地の南東約３㎞に位置する。吉井川と加茂川の合流点から南約600mの地点に所在する。行政区画は、岡山県津山市日上字小深田1369-1番地ほかに相当する。

遺跡の存在するのは、低地との比高差10m足らずの吉井川沿いの河岸段丘上で、遺跡の西側を南下する吉井川に向かってやや張り出した地形を呈する。遺跡の範囲は、調査区を中心とし、東西南北ともに約100m程度と思われるが、東端については未確認である。

2．周辺の遺跡

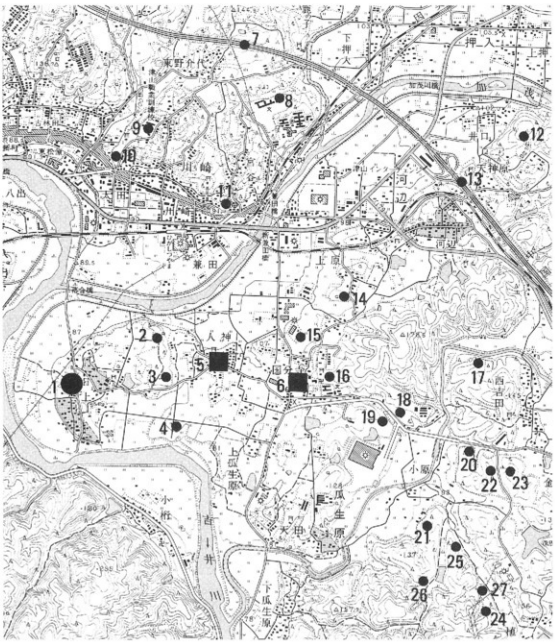
遺跡の所在する日上地区は北側を西行する加茂川によって、西及び南側を蛇行しながら南下する吉井川によって囲まれている。東側はそのまま国分寺地区に続いている。すなわち、東を除く三方が河川により囲まれた地域で、段丘あるいは台地状の地形が卓越する。台地中央には南北約500m、東西約600mの丘陵が存在する。中央に存在する南北方向の谷部によって東西に分かれた丘陵の東側が畝山である。

この畝山丘陵北端に弥生時代後期の墳丘墓ないしは区画墓が存在することが発掘調査によって確認されている（註１）。墳丘墓は、その上に築かれた古墳によって原形をとどめないが、東西約18m、南北推定15mの方形で、墳丘内部からは木棺墓５基が発見されている。墳丘の北側には円礫を用いた列石が認められる。同一丘陵のいくつかの地点で同時期の土器が出土しているので、畝山丘陵には当時、広範に人々が居住していたと考えられる（註１）。日上地区における弥生時代遺跡は畝山だけにとどまるのではなく、過去の断片的な資料によればその周辺にも広がっていたと推定されるが、本遺跡の発掘まであまり明らかではなかった。

周辺部では、代表的な弥生時代集落遺跡として加茂川を隔てた北方に、中期（Ⅳ期）に属する押入西遺跡を、北東約３㎞の地点に環濠をもつ後期（Ⅴ期）の天神原遺跡を、そして東方に中期（Ⅲ期）から後期に属する西吉田遺跡と西吉田北遺跡をあげることができる。以上の他にも、中核工業団地の建設に伴う発掘調査が進んだ金井・瓜生原地区では、金井遺跡、大畑遺跡、小原遺跡など、中期および後期の集落遺跡が数多く存在する。

日上地区の古墳時代遺跡としては、古式の前方後円墳である日上天王山古墳（註２）があげられる。畝山の南端部に位置し、墳長約57mでバチ形に開く前方部をもつ。畝山丘陵のほぼ全域に日上畝山古墳群が存在する（註１）。現在56基の存在が確認されているが、過去の開拓等によって失われたものを含めれば、100基近い小墳が存在したと考えられる。これらには前半期に属する方墳を一部含むものの、大部分は５世紀末から６世紀初頭の短期間に築造された円墳で、代表的な「古式群集墳」として有名である。畝山の南方台地状に日上和田古墳（註３）がある。推定直径19mの円墳で、円筒埴輪をもつ。６世紀前半の築造と考えられている。この墳丘下からは方形の竪穴式住居１棟が検出され、５世紀後半に位置づけられ、畝山古墳群の被葬者との関係が想定されている。

周辺部ではこうした「古式群集墳」の分布が認められる。長畝山北古墳群、長畝山古墳群、河辺小学校裏古墳群がそれで、いずれも数基から10数基の円墳からなる。なかでも長畝山北古墳群（註４）は、そのほとんどが調査され全貌が明らかとなった例として重要である。そのほかにも小規模な古墳群には



1．日上小深田遺跡
2．日上畝山古墳群
3．日上天王山古墳
4．日上和田古墳
5．美作国分尼寺跡
6．美作国分寺跡
7．押入西遺跡
8．狐塚遺跡
9．川崎六ツ塚古墳群
10．玉神大塚古墳
11．兼田丸山古墳
12．井口東塚古墳
13．天神原遺跡
14．河辺上原遺跡
15．国分寺跡傍古墳
16．河辺小学校裏古墳群
17．西吉田北遺跡
18．長畝山北古墳群
19．長畝山古墳群
20．茶山古墳群
21．大畑遺跡
22．一貫西遺跡
23．一貫東遺跡
24．崩レ塚遺跡
25．柳谷古墳
26．小原遺跡
27．クズレ塚古墳

第１図　日上小深田遺跡と周辺の遺跡分布図（S＝１：25000）

小原古墳群や大畑古墳群などがあげられる。このうち茶山古墳群（註５）は、墳長20.6mの小形前方後円墳と円墳からなり、一帯の古墳群を考える上で欠かせない存在である。

特徴的なことは、これらの古墳築造が５世紀末から６世紀初頭に集中することで、この一帯においては、やや先行する崩レ塚古墳群、西吉田北古墳、一貫東古墳群などの存在はあるものの、後続する横穴式石室墳としてはクズレ塚古墳と柳谷古墳（註６）を認める程度で、ほとんど存在しない。後者から

は銀象嵌頭椎大刀把頭が出土している。

奈良時代においては、畝山の東方に美作国分尼寺が、国分寺地区に美作国分寺が造営される。

このように、日上地区を含むこの一帯では、弥生時代から人々の居住が始まり、古墳時代から古代を通じて多くの遺跡が形成されてきた。特に、古代においては国分二寺の存在から付近に官道（山陽道美作支路）の存在を想定する説（註７）もあり、交通関係においても重要な地域であると評価できる。

註

（１）安川豊史　1998　「日上畝山古墳群」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第63集

（２）近藤義郎他　1997　「山上大王山古墳」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第60集

（３）行田裕美　1981　「山上和田古墳」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第6集

行田裕美　1996　「日上和田古墳」増補」「年報津山弥生の里」第３号

（４）行田裕美・木村祐子　1992　「長畝山北古墳群」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第45集

行田裕美・小郷利幸　1996　「長畝山北11号墳」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第57集

（５）保山義治　1989　「糸山古墳群」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第27集

（６）行田裕美・保田義治　1988　「柳谷古墳」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第24集

（７）中村太一　1990　「山陽道美作支路の復原的研究」「歴史地理学」第150号

湊哲夫　1992　「国分寺跡・国分尼寺跡」「吉備の考古学的研究」（下）

II　調査の経過

1．調査にいたる経過

平成６年度、日上西地区において土地改良総合整備事業が計画された。平成７年から10年度までの予定で、加茂川と吉井川の合流地点付近から南東側の約23.0haの農地を土地改良する事業である。対象地は河川沿いの低地を中心とする一帯で、計画当初段階には周知の遺跡は存在しなかった。

しかし工事対象範囲が広大なことに加え、中には自然堤防状あるいは段丘状地形も存在することから遺跡の存在する可能性が考えられたので、事前に全域の分布調査を実施することとした。

事業主体者である津山市国分寺471-2番地自井手土地改良区理事長原田武蔵から、平成６年６月23日付けで調査依頼を受け、同年７月20日から７月28日まで全域の分布調査を実施した。その結果、５地点で遺物を採集した。採集したのはいずれも土器片で、古墳時代から中世にかけてのものである。採集地点周辺の地形も考慮に入れ、次の３地区に遺跡の存在が推定された。

第１は、工事予定地の南東沿いに位置する低位段丘で、南北約500m、東西約100mの範囲である。ここからは中世に属すると思われる土師器と須恵器が少量採集された。第２は、予定地のほぼ中央に南北に広がる中州状の自然堤防で、南北長370m、最大幅100mをはかる。工事予定地のほとんどが水田であったのに対し、この地区だけは畑として利用されており、分布調査時の観察では砂地であった。ここからは中世と推定される須恵器および備前焼片が少量採集された。第３の地区は、工事予定地の中央に東側から舌状に張り出した高位段丘である。南北約100mの広がりをもち、東側は工事対象地外に続く。このうち、やや北よりの畑地で古墳時代から奈良時代にかけての須恵器片を比較的多く採集した。

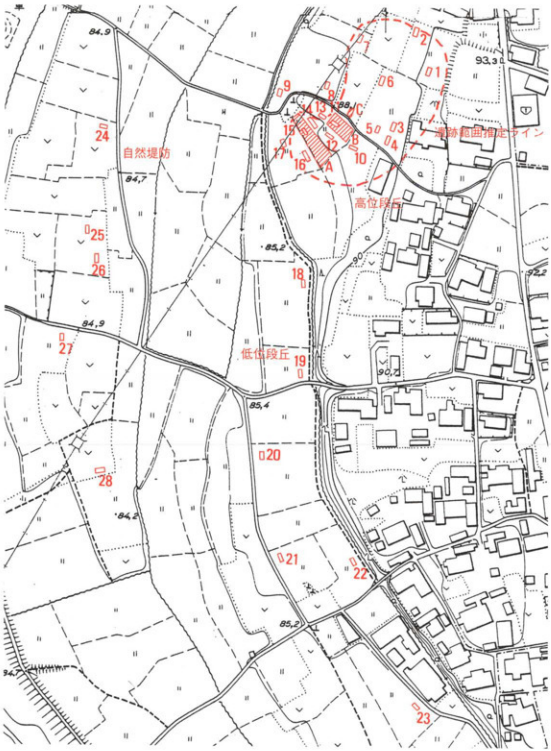
2．調査経過

確認調査は平成７年11月６日から実施した。対象地域内では、採集遺物及び周辺地形から、高位段丘、低位段丘、自然堤防の３地区に遺跡の広がりが予測された。調査はこの３地区について、Ｔ－１からＴ－28まで合計28本、幅２m、長さ５m～８mのトレンチ（試掘溝）を設定し、掘り下げることとした。調査面積は約290㎡である。調査は、現地での聞き取り調査などにより、低位段丘、自然堤防部分には遺構の存在する可能性は薄いと考えられたことから、最も遺構の存在する可能性が高いと考えられた高位段丘部分を重点的に調査することとした。調査は各トレンチについて設定から埋め戻しまでの一連の作業を終わらせながら順次進行させた。この結果、ピット、溝など多数の遺構が検出された他、古墳時代から古代にかけての土師器、須恵器、瓦などが多数出土し、また、中世の土器や鉄滓なども出土した。このことから、この高位段丘部分に古墳時代から中世にかけての遺跡の存在が推測された。

１月10日に高位段丘部分の調査を終了し、低位段丘部分の調査に着手した。調査の結果のところでも述べるが、ほとんどが吉井川の氾濫原としてのあり方を示しており、いずれのトレンチからも遺構は検出されなかった。

１月26日自然堤防部分の調査に入った。各トレンチは低位段丘部分同様、氾濫原としてのあり方を示し、遺構は検出されなかった。２月15日に最後のトレンチを埋め戻し、２月16日に撤収作業をおこなって現地での作業をすべて終了した。

発掘調査は平成10年10月19日より開始した。調査区は３箇所に分かれており、南西側から順にＡ地区、Ｂ地区、Ｃ地区と命名し、調査もその順で実施した。Ａ、Ｂ地区はバックホーにより表土剥ぎをお



（白ぬき：平成７年度確認調査　　斜線：平成10年度発掘調査）

第２図　日上小深田遺跡トレンチ配置図（赤色部分）

こない、その後人力で掘削、Ｃ地区についてはすべて人力により掘削した。10月の終わりにはＡ地区の遺構検出をほぼ終え、遺構掘削と平行して11月２日にはＢ地区の掘り下げを開始した。11月10日にＳＤ１を掘り下げ、その他の遺構も順次検出、掘削をおこなった。11月16日にはＳＨ１の形状を把握するため調査区の西隅を一部拡張した。Ｂ地区ＳＤ１と平行する溝の有無を確認するため、11月18日にＣ地区

の掘削を開始。11月20日にはすべての発掘作業を終え、11月24日にはラジコンヘリによる空中写真撮影をおこなった。11月30日には機材を撤収し、12月1日にはすべての調査を終了した。12月6日には、地元住民を対象とした現地説明会を実施した。

3．調査体制

発掘調査は津山市教育委員会が主体となり実施した。調査体制は次のとおりである。

津山市教育委員会　教育長　松尾康義（H8．10．1～）
教育次長　菊島俊明（H10．4．1～）
文化課長　永禮宣子（H9．4．1～H11．3．31）
森元弘之（H11．4．1～）
文化財センター所長　神田久遠（～H10．3．31）
中山俊紀（H10．4．1～）
次長　安川豊史（発掘調査担当、H11．4．1～）
主査　行田裕美（確認調査担当）
主事　坂本心平（〃　、～H8．3．31）
主事　川村雪絵（発掘調査担当、H11．4．1～）

整理作業は文化財センター野上恭子、岩本えり子、家元弘子、山本有希、上原香里、二谷順子、仁木智子、上原恵美が担当した。

発掘作業は社団法人シルバー人材センターにお願いした。作業従事者は下記の方々である（敬称略）。

内田久仁男、神崎昌徳、田口晴道、中村　信、野口定男、橋本　潔、脇山　康

なお、発掘調査及び報告書の作成にあたり、津山弥生の里文化財センター職員の御協力をいただいた。深く感謝の意を表したい。

III　調査の記録

1．確認調査の記録

（1）高位段丘部分（T－1～T－17）（第3図～第5図）

T－1（2m×5m）（第3図1）

2層は水田の床土で、その直下が遺構面となっている。遺構は、溝1、ピット2を検出した。遺物は、ピット及び溝の埋土から土師器、須恵器の小片が数点出土した。

T－2（2m×5m）

遺物包含層である3層から土師器、須恵器の小片が若干量出土した。遺構は検出していない。

T－3（2m×5m）（第3図2）

床土（2層）、造成土（3、4層）の下は厚い遺物包含層（5、6層）となり、遺構面に達する。包含層からは弥生時代から奈良時代のものと思われる土器片や鉄滓などが若干量出土している（図版7－9）。また、遺構面からはピット1を検出しており、ピット内から平瓦片が出土した（第5図8）。現存長23.6cm、端部の幅27.0cm、厚さ2.0cmをはかる。成形方法は粘土板貼り付けによるものと思われる。凸面の調整は平行タタキで、凹面には布圧痕がみられる。焼成は良好で、淡褐色を呈する。奈良時代中葉から平安時代初頭のものと思われる。

T－4（2m×5m）

床土、造成土の下は遺物包含層となる。包含層からは土師器、須恵器の小片が若干量出土した。図化できたものには、8世紀代の土師器杯（第5図5）がある。遺構は検出されていない。

T－5（2m×5m）

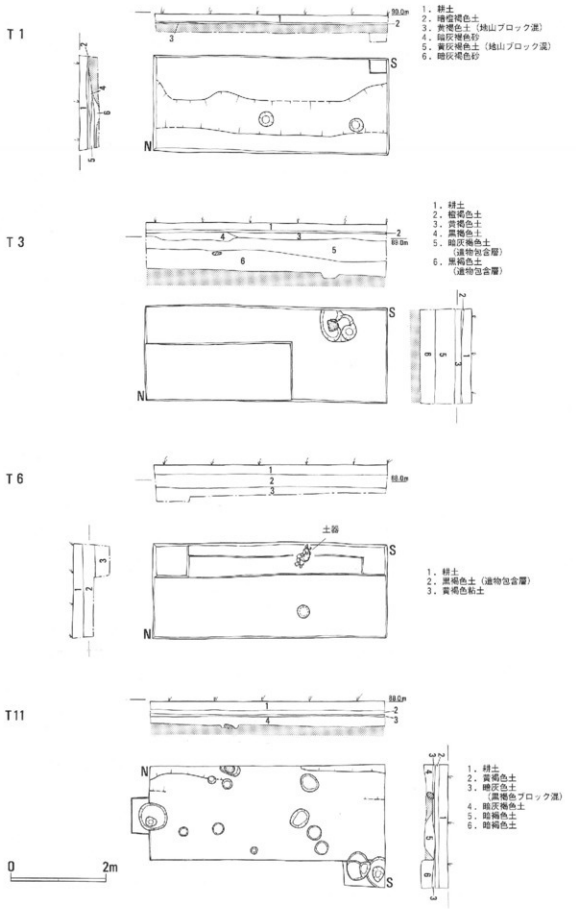
床土の下に遺物包含層があり、地山に達する。包含層からは土師器、須恵器の小片が若干量出土した。遺構は検出されていない。

T－6（2m×5m）（第3図3）

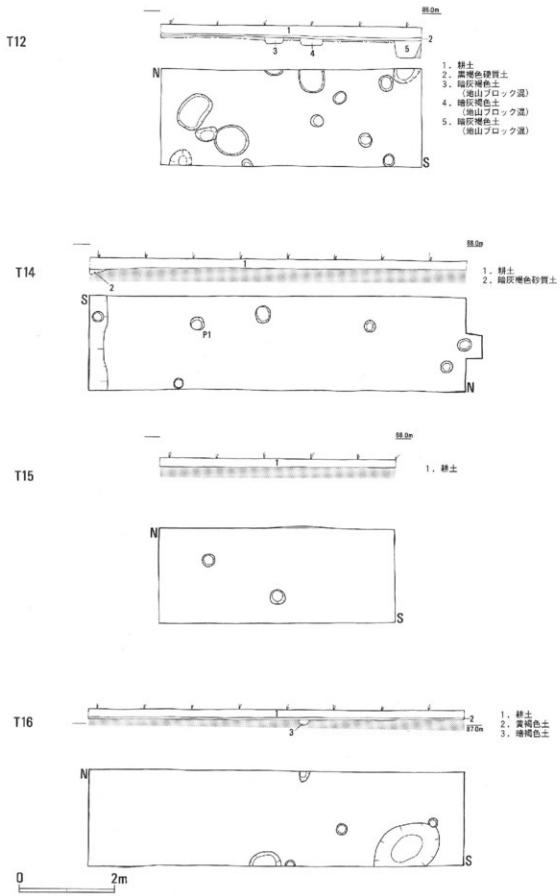
現耕土（1層）の直下に遺物包含層（2層）があり、遺構面に達する。包含層からは土師器、須恵器片が出土した。特にトレンチ中央部東壁沿いからは土師器、須恵器がまとまって出土した（第5図1～4）。1は須恵器の杯身である。口縁部は内傾して立ち上がり、端部はわずかに段がみられるのみで、ほぼ丸くおさめる。底部のヘラ削りの範囲は狭く、5分の1程度である。口径15.8cm、高さ4.6cmを測る。2は土師器の甕である。体部から「く」の字状に屈曲しており、端部は丸くおさめる。外面調整は風化のため不明だが、内面は屈曲部分直下からヘラ削りを施している。3は土師器の甕である。口縁部から底部に向かって直線的にすぼまる形状で、口縁部から7.5cmのところに把手をつけている。調整は風化のため不明。口径23.8cm。4は須恵器の甕である。口縁部から体部にかけてはやや膨らんでおり、底部にむかってすぼまる。口縁端部は外側に折り返している。把手は口縁部から約7cmのところにつけられている。外面はタタキ調整の後、横方向にナデ消しており、内面も当て具痕がナデ消されている。口径26cm。杯身の形態が田辺編年のTK10に比定されることから、これらの土器の年代は6世紀中頃のものと思われる。また、遺構面からはピット1が検出された。

T－7（2m×5m）

現耕土（1層）直下が遺構面となる。ピット1、土坑1が検出されたが、土坑は底面が不整であり、自然ものである可能性が高い。



第３図　確認調査トレンチ平面・断面図（１）（Ｓ＝１：80）



第４図　確認調査トレンチ平面・断面図（２）（Ｓ＝１：80）

T－8（2ｍ×5ｍ）

床土（3層）直下は礫層となる。遺構は検出されていない。

T－9（2ｍ×5ｍ）

現耕土（1層）、砂層（2層）の下は礫層となる。遺構は検出されていない。

T－10（2ｍ×5ｍ）

床土（2層）の下は厚い遺物包含層（3、4層）となり、地山に達する。遺構は検出されていない。包含層からは土師器、須恵器片や瓦片などが若干量出土した。4層下部からは奈良時代後半のものと思われる須恵器の杯が出土した（第5図6）。

T－11（2ｍ×5ｍ）（一部拡張）（第3図4）

床土（2層）、整地層（3層）の下が遺構面となる。溝及びピットが10余り検出されており、遺構埋土内から土師器、須恵器片が若干量出土している。なお、この部分については発掘調査のB地区と重複している。

T－12（2ｍ×5ｍ）（第4図1）

床土（2層）の直下が遺構面となる。ピットが10余り検出された。遺構埋土からは弥生土器または土師器と思われる土器片、須恵器片や、安山岩の剥片などが若干量出土した。

T－13（2ｍ×5ｍ）

現耕土直下が地山となる。遺構は検出されていない。遺物は、トレンチ全体で土師器、須恵器の小片が数点出土した。

T－14（2ｍ×8ｍ）（一部拡張）（第4図2）

現耕土直下が遺構面となる。ピット7及び溝と思われる遺構が検出された。遺物は、P1より勝間田焼の椀が出土した（第5図7）。底部は平高台状で、回転糸切りである。口縁部が欠損しているため詳細は分からないが、高台のつくりがしっかりしていることから、12世紀代の前半に位置づけられよう。その他、トレンチ全体で須恵器、中近世の土器片が数点出土した。

T－15（2ｍ×5ｍ）（第4図3）

現耕土直下が遺構面となる。ピット2が検出された。遺物は、トレンチ全体で須恵器片が若干量出土した。

T－16（2ｍ×8ｍ）（第4図4）

床土（2層）直下が遺構面となる。ピット5、土坑1が検出された。遺物は、トレンチ全体で土師器、須恵器片が若干量出土した。

T－17（2ｍ×5ｍ）

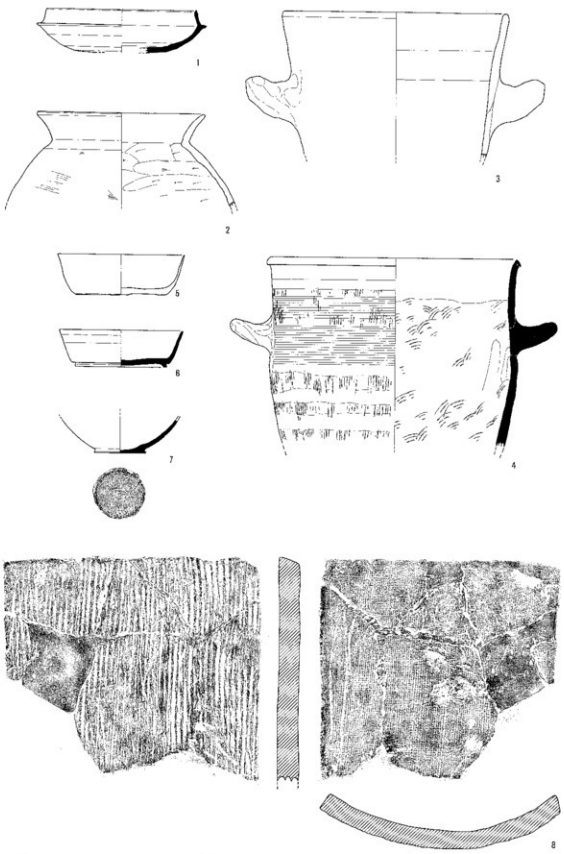
暗灰色土（2層）の下は約30cmの砂層となり、礫層に達する。遺構は検出されていない。

（2）低位段丘部分（T－18～T－23）

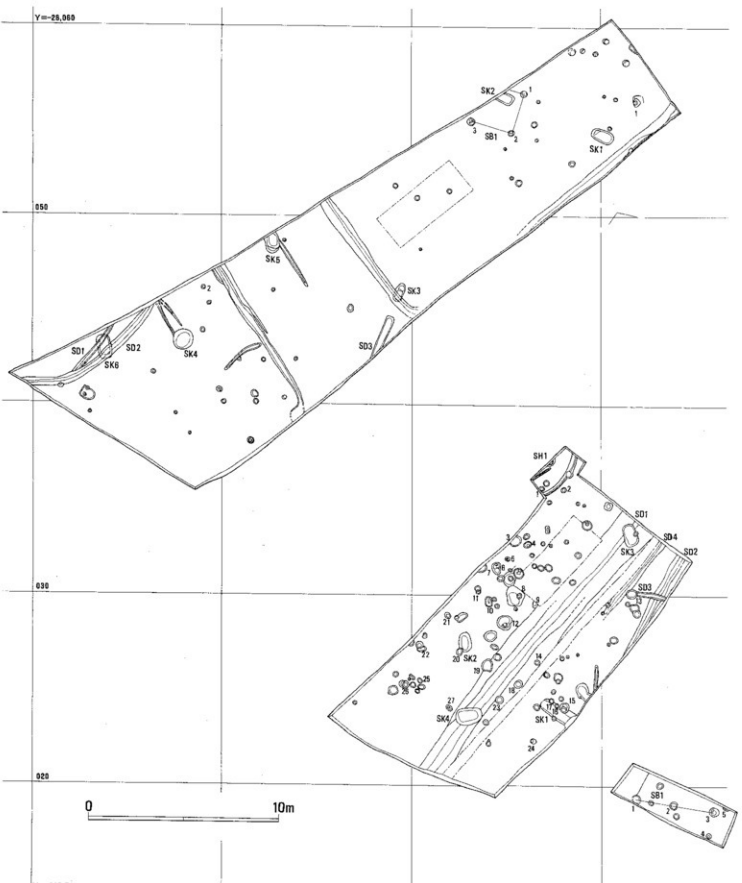
T－18、T－19で床土、整地層直下から地山が検出された他は、いずれのトレンチも洪積砂層が厚く堆積しており、吉井川の氾濫原としてのあり方を示している。遺構は検出されていない。

（3）自然堤防部分（T－24～T－28）

いずれのトレンチも低位段丘部分と同様、吉井川の氾濫原としてのあり方を示している。T－24から



第5図　確認調査出土遺物実測図(1～4＝T－6、5＝T－4、6＝T－10、7＝T－14、8＝T－13)(S＝1：4)



第６図　日上小深田遺跡発掘調査区平面図（Ｓ＝１：200）

T－27では、いずれも現耕土層の下が砂層となり、礫層に至る。T－28では洪積砂層が厚く堆積している。いずれのトレンチからも遺構は検出されていない。

（4）試掘調査のまとめ

遺構が検出されたのは、高位段丘部分に限られる。このうち、T－1、T－2、T－7～T－16に至る部分は遺構面のレベルが高く、遺構の密度も高い。これに対し、南東側のT－3、T－10では遺構面のレベルが相対的にかなり低く、遺構の密度も低い。また、遺構面の上には遺物包含層が厚く堆積している。北西側、西側のT－8、T－9、T－17では水田床土の下は砂層、礫層であり、過去に河原であった状況を示している。これらのことから、旧地形を復元すると、T－1、T－2、T－7周辺からT－15、T－16周辺へ南西にのびる尾根状の微高地が想定される。遺構の密度から判断しても、遺跡はこの部分を中心として存在し、南東側の谷状部にも一部広がる様相を呈すると考えられる（第2図の点線部分）。

検出された遺構のうち、明確にその性格が分かるものはないが、集落跡に伴うものである可能性が高い。出土遺物は古代～中世のものが中心であるが、弥生時代から近世まで幅広い時期のものがみられる。詳細は発掘調査のまとめのところで述べる。

2．発掘調査の記録

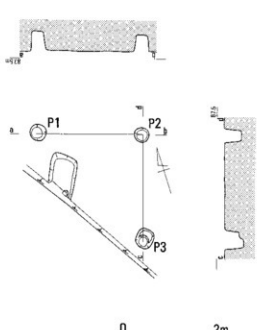
発掘調査は、土地改良区の区域内の3箇所に調査区を設定しておこなった（第6図）。調査区は西から順にA地区（約330㎡）、B地区（約200㎡）、C地区（約12㎡）とした。以下、調査区ごとに遺構、遺物について説明する。

（1）A地区の調査

建物跡（第7図）

SB1

調査区の北西部に1棟のみ検出した。柱穴は合計3つ検出されており、調査区の範囲内で復元できるのは桁行1間、梁間1間の建物であるが、南西方向にさらに1間分のびる可能性もある。建物の方向はN－18° －Eである。柱間は東西2.3m、南北2.3mをはかる。出土遺物はP2より土師器の小片が出土したのみで、正確な時期は分からない。

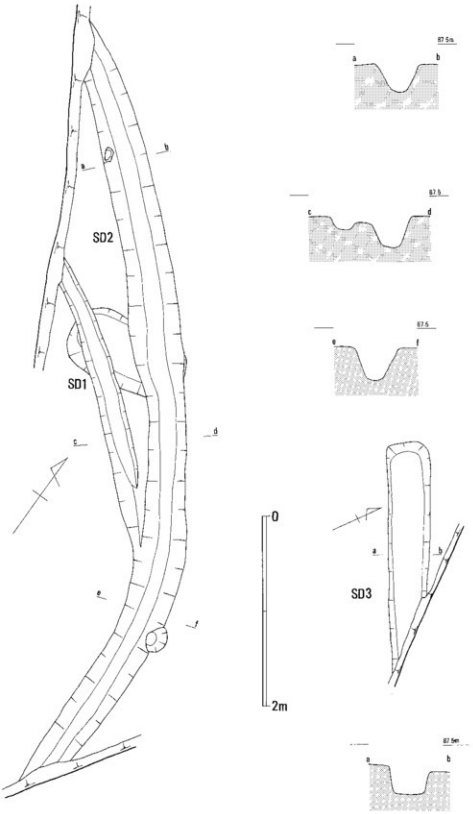


第7図　A地区SB1平面・断面図（S＝1：80）

溝（第8図・第9図）

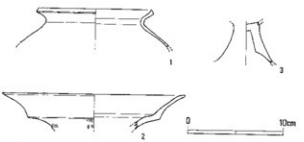
SD1

調査区の南西部で検出しており、SD2とは南端で合流している。検出された部分の幅0.2～0.3m、深さ0.15mをはかり、北西方向へ



第８図　Ａ地区ＳＤ１～３平面・断面図（Ｓ＝１：40）

さらにのびるものと思われる。溝の中からは弥生土器の小片が出土したのみで、正確な時期は分からないが、ＳＤ１とＳＤ２は同方向につくられており、埋土の観察からも後述するＳＤ２との時期的な違いはあまりないものと思われる。



第９図　Ａ地区ＳＤ２出土土器実測図（Ｓ＝１：４）

ＳＤ２

調査区南西隅で検出し、両端は調査区外へさらにのびている。緩やかに弧を描く形状であり、ＳＤ１が南端で合流している。幅0.4～0.5m、深さ0.3～0.35mをはかる。出土遺物としては、甕の口縁部（第９図１）、高杯の杯部及び脚部（同２、３）などがある。１は「く」の字に外反しており、端部を上方にのみわずかに肥厚させている。風化が著しく、調整は観察不可能である。２は皿部から外反しながら上方へのびる形状で、端部は丸くおさめている。外面にはわずかにハケ目が残る。３の脚部は、屈曲して裾部が外方にむけて広がる形状のものである。これらの出土遺物はすべて弥生時代後期後半に位置づけられるものである。

ＳＤ３

調査区東側の壁際に位置し、南東方向へさらにのびる。幅0.45m、深さ約0.3mをはかる。出土遺物はなく、時期を特定することはできなかった。

土坑（第10図）

ＳＫ１

調査区北部に位置する隅丸方形の土坑である。規模は長辺1.2m、短辺0.7m、深さ0.3mで、南側の傾斜がやや急である。壺の頸部と思われる凹線文を施した土器（図版８－８）、サヌカイトの剥片などが出土しており、時期は弥生時代中期後半と考えられる。

ＳＫ２

調査区西側の壁際に位置する隅丸方形の土坑で、一部調査区外にのびる。規模は検出された部分で長辺0.8m、短辺0.5～0.55m、深さ0.3mであり、断面は長方形を呈する。遺物は出土せず、時期、性格などの詳細は不明である。

ＳＫ３

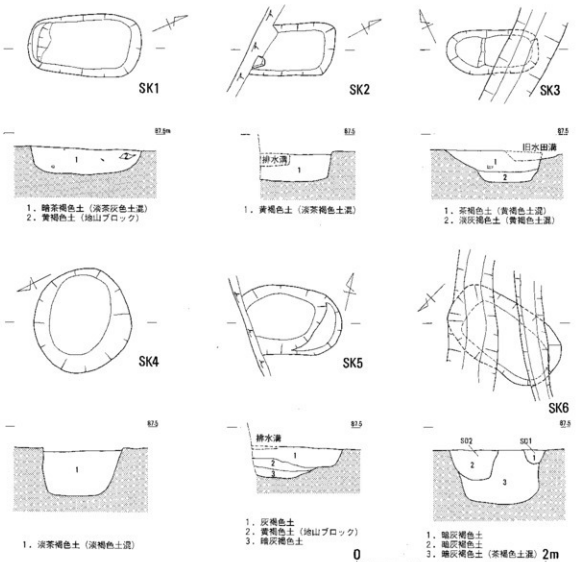
調査区中心部東寄りに位置する。楕円形に近い隅丸方形を呈する土坑である。東半部の上面を後世の水田の暗渠により削平されている。規模は長辺１m、短辺0.5m、深さ最大0.35mである。出土遺物はなく、時期、性格なども不明である。

ＳＫ４

調査区の南側中央に位置する円形土坑である。規模は直径１～1.1m、深さ0.5mである。出土遺物は土器片１のみで時期は不明であるが、落とし穴である可能性が高い。

ＳＫ５

調査区西側の壁際に位置する楕円形土坑で、一部調査区外にのびる。復元規模は長径1.1m、短径0.7m、深さ最大0.35mである。古代のものと思われる土師器、須恵器の小片が出土している。



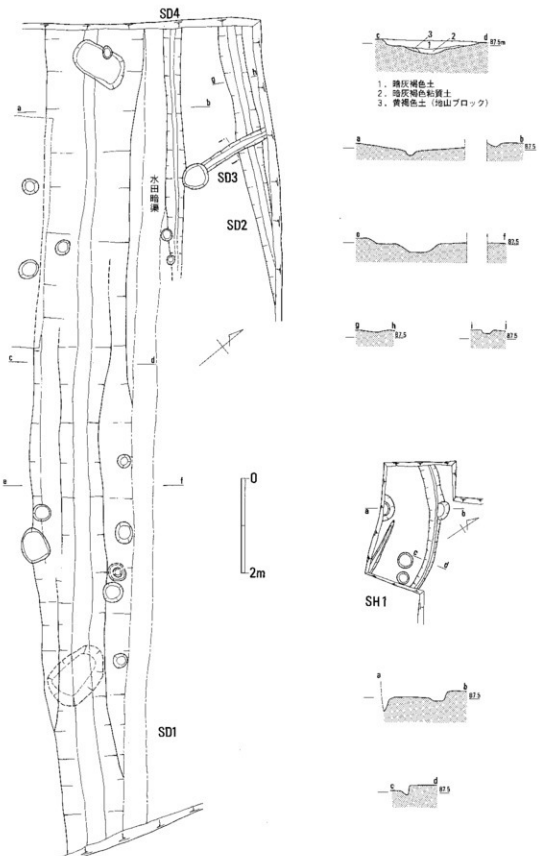
第10図　A地区ＳＫ１～６平面・断面図（Ｓ＝１：40）

ＳＫ６

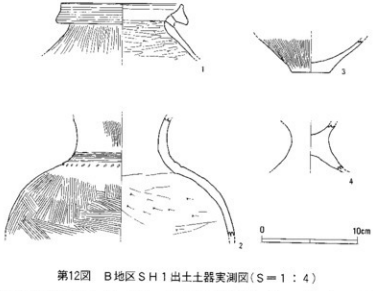
調査区南西部に位置し、ＳＤ１とＳＤ２に切られる形で検出している。隅丸方形を呈し、規模は長辺1.3m、短辺約0.7m、深さ0.56mである。出土遺物はまったくみられない。このような土坑はしばしば縄文時代の狩猟用の落とし穴とされることが多く、このＳＫ６の場合も弥生時代の溝に切られていることから、落とし穴である可能性が高い。また、落とし穴の床面中央部には杭をさすための小穴があることが多いが、今回検出したものはその小穴はみられない。

その他

以上の他に、Ａ地区では20余りのピットが検出されたが、建物に復元できるものはなかった。また、２個のピットから土師器、須恵器の小片がそれぞれ出土しており、それらはおそらく奈良時代以降のものと思われるが、正確な時期は分からない。また、掘り下げの段階で、古代から近世にわたる時期の土器片が出土したが、いずれも復元できる大きさではなかった。



第11図　B地区ＳＨ１、ＳＤ１～４平面・断面図（Ｓ＝１：80）



第12図　B地区ＳＨ１出土土器実測図（Ｓ＝１：４）

（２）Ｂ地区の調査

住居跡（第11図）

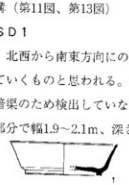
ＳＨ１

調査区西隅に位置する竪穴住居である。ここで検出されたのは一部分で、復元すると直径６ｍ前後の円形の竪穴住居になると思われる。立て替えの痕跡はみられない。最西端にある柱穴（半分検出したもの）は復元径0.4ｍ、深さ0.3ｍ程度で、おそらくこの住居に伴う柱穴と思われる。住居内で検出されたその他の遺構としては、ピット２、溝１が検出されたが、いずれもこの竪穴住居に伴うものであるか分からない。出土遺物として甕の口縁部、壺の体部、底部、高杯の脚部などがある（第12図１～４）。１は頸部から「く」の字状に強く外反しており、端部は上下に拡張している。頸部の屈曲部分に円孔を穿っている。この孔は１方向のみみられるが、本来は180°回転したところにもう１箇所穿孔されていたと思われる。体部は外面ハケ、内面は頸部直下よりヘラ削りをおこなっている。２は口縁部を欠いているが、筒状の頸部から外反して上方に開く形状のものである。頸部の外面には４条の凹線をめぐらせ、その直下に列点文を施す。体部外面はハケ、内面は頸部直下からヘラ削りをおこなっている。残存部分の外面全体に赤色顔料が塗布されており、体部から頸部付近にかけてススの付着がみられる。３は外面ハケ調整の底部である。４は短いタイプの脚部である。椀形の杯部をもつものと思われる。これらの遺物は弥生時代後期前半のものと思われる。

溝（第11図、第13図）

ＳＤ１

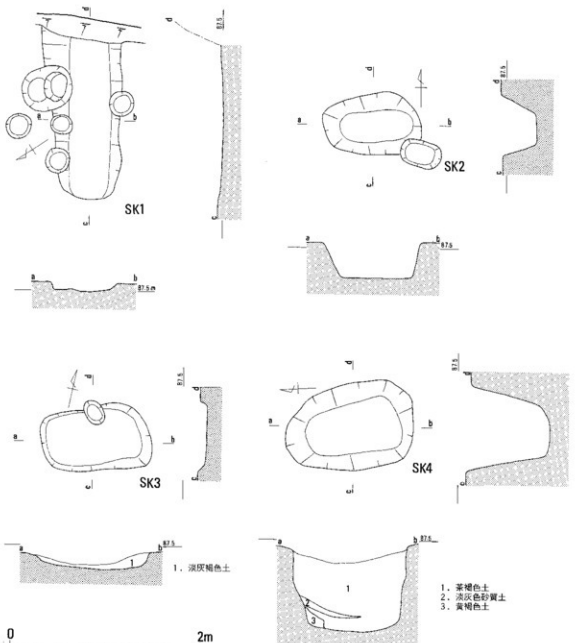
北西から南東方向にのびる溝である。調査区の中心を縦断しており、両端とも調査区外へさらに続いていくものと思われる。また、この溝は現在の地割りに平行してはしっている。北東側の一部は水田の暗渠のため検出していない。溝は浅い二段堀りになっており、南西側でその段はより顕著である。残存部分で幅1.9～2.1ｍ、深さは一段目で0.1～0.15ｍ、二段目までの深さは0.25～0.3ｍをはかる。出土遺物は小片のみで復元できるのは高台のついた杯２点のみである（第13図１、２）。高台のつくりがしっかりしているがあまり開き気味でないことや、全体的に成形が丁寧であることから、平城宮Ⅲから Ⅳの段階（奈良時代後半頃）のものと思われる。このＳＤ１と同方向の溝と思われる落ち込みが、後述するＣ地区において検出されている。これら２つの溝の性格については後で述べる。



第13図　B地区ＳＤ１出土土器実測図（Ｓ＝１：４）

ＳＤ２

調査区の北側隅に位置する。ＳＤ１と同様、北西から南東方向にのびてお



第14図　B地区ＳＫ１～４平面・断面図（Ｓ＝１：40）

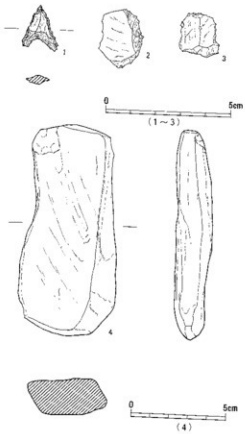
り、南東部は調査区外に続く。規模は幅0.4～0.5m、深さ0.05～0.1mである。出土遺物は古代のものと思われる土師器、須恵器片があるが、復元できるものはなかった。

ＳＤ３

調査区の北側に位置し、南北方向にのびる溝である。北端でＳＤ２を切っており、さらに調査区外へ続くと思われるが、南側はＳＤ４の手前でとぎれている。規模は幅0.2m、深さ0.07mである。ＳＤ２との切り合い関係から、ＳＤ２よりは後の時代のものであるが、出土遺物が土師器の小片のみであるため、明確な時期は分からない。

ＳＤ４

ＳＤ１とＳＤ２の間に位置する。溝のはしる方向はＳＤ１、２と同様、北西から南東である。調査区



第15図　B地区ＳＫ１出土土器実測図
Ｓ＝２：３(１～３)、Ｓ＝１：２(４)

の北西端から約５ｍのところでとぎれている。規模は幅0.3～0.4m、深さ0.06mである。古代のものと思われる土師器や須恵器片がわずかに出土するのみで、正確な時期は不明である。

土坑（第14図、第15図）

ＳＫ１

調査区東側の壁際に位置する浅い土坑である。西側は隅丸になっており、東側は調査区外へ続く。検出した範囲で長辺1.7m、短辺0.5～0.9mをはかり、深さは0.05～0.1mである。埋土中からは弥生土器小片の他、石鏃、石斧の未製品、数点のサヌカイトの剥片がみつかっている（第15図１～４）。また、土坑の上面には石列がみられたが、これが何を意味するものかは分からない（図版５－４）。今回の調査で石器が出土したのはこの土坑からのみである。正確な時期は分からないが、土器の中に薄手のものが多くみられること、剥突を施すものがみられることなどから、弥生時代後期後半のものと思われる。

ＳＫ２

調査区の中央からやや南寄り、ＳＤ１の南西側に位置する楕円形の土坑である。規模は長辺１m、短辺0.45～0.7m、深さ0.4mで、断面は逆台形を呈する。出土遺物は土師器、須恵器の小片などがあり、古代のものと思われる。

ＳＫ３

調査区北西部に位置し、上部はＳＤ１によって削平されている。ＳＤ１の底が検出された後にみつかっている。隅丸方形の土坑で、規模は長辺1.2m、短辺0.6～0.7m、深さは検出した面（ＳＤ１の底）から0.05～0.15mである。出土遺物はなく時期を判断できないが、ＳＤ１との切り合い関係からすれば、奈良時代以前のものであろう。

ＳＫ４

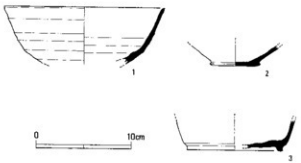
調査区の南東部に位置する楕円形の土坑である。規模は長辺1.3～1.4m、短辺0.7～0.95m、深さ0.7～0.8mである。出土遺物がないため時期は特定できないが、Ａ地区のＳＫ６と同様、穴の床面中央部に小穴のない落とし穴であると思われる。

第16図　B地区Ｐ21出土土器実測図(Ｓ＝１：４)

その他の遺構・遺物（第16図、第17図）

以上の他に、Ｂ地区では約30余りのピットが検出された。そのうち土器などの遺物がみつかったものは27あるが、建物の柱穴として並ぶものはみつからなかった。ピットからの出土遺物は土師器や須恵器の小片のみで復元できるものはなく、時期を特定できるものはないが、Ｐ21出土の高台のついた底部片（第16図）などは、奈良時代後半のものであると思われる。

また、遺構に伴わない包含層中の遺物として、須恵器の椀、杯などがある（第17図）。1、2は勝間田焼である。1は椀で、体部は深く内湾し、口縁端部は丸くおさめる。底部は欠損しているが、平高台状のものと思われる。2は椀の底部で、糸切り痕がみられる。1、2のいずれも勝間田焼の中でもやや古い段階である12世紀代のものである。3は杯の底部である。破片のため正確な時期は不明だが、先にあげたＳＤ１やＰ21出土のものよりもやや後出する奈良時代末から平安時代にかけてのものと思われる。



第17図　Ｂ地区包含層出土土器実測図（Ｓ＝１：４）

（３）Ｃ地区の調査（第18図）

Ｃ地区の調査は、先述したように当初は調査を予定していなかった。しかしＢ地区においてＳＤ１が検出され、この溝に平行する同時期の溝の有無を確認するため、急きょＢ地区から道路を隔てた北東側に調査区を設定することとなった。

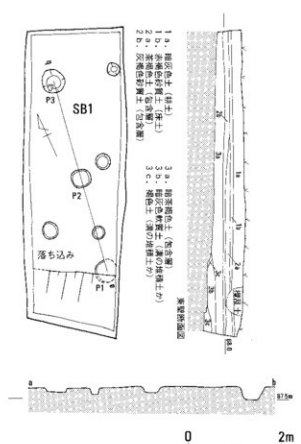
建物跡

ＳＢ１

調査区内に南北方向に検出した。３つの柱穴が検出されており、南北方向のみ２間分を復元できるだけであるが、おそらく東西方向のどちらかにのびていき、２間×１間程度の建物になると思われる。柱穴列の方向はＮ－９°－Ｅで、柱間は全長約4.2mである。出土遺物はＰ１、Ｐ３より弥生土器片が出土した。いずれも小片であるが、おそらく弥生時代後期前半頃のものであろう。

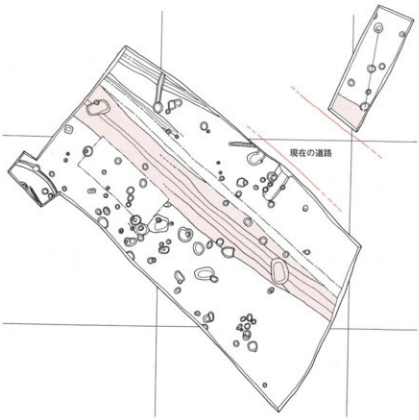
落ち込み

調査区の南端から約１ｍのところからなだらかな傾斜がみられ、傾斜は道路側へさらにのびていく。調査区が狭いため、この落ち込みの全容を把握することはできず、出土遺物も全くみられなかったので、時期の特定もできない。しかし落ち込みの方向は明らかにＳＤ１と平行であり、何らかの関連を想定することは可能と思われる。



第18図　Ｃ地区トレンチ・ＳＢ１平面・断面図（Ｓ＝１：80）

Ⅳ　まとめ



第19図　Ｂ地区ＳＤ１とＣ地区落ち込みの位置関係(朱色アミ点部分)

今回の発掘調査では、主として弥生時代と奈良時代の遺構が確認できた。

縄文時代のものと思われる遺構は、Ａ地区のＳＫ６、Ｂ地区のＳＫ４などがある。遺物がなく、円形である程度の深さをもつという特徴をもつことから、落とし穴であったと思われる。

弥生時代の遺構としてはＡ地区ＳＫ１が中期後半の遺構としてあげられる。中期の遺構として確実に判断できるものはこの１つのみで、この時期の遺構の広がりを考えるのは困難である。後期になると前半でＢ地区ＳＨ１、Ｃ地区ＳＢ１、後半でＡ地区ＳＤ１、２などがみられるようになり、集落が営まれたものと思われる。しかし確認調査の結果からも分かるように、低位段丘部分及び自然堤防部分においては遺構はほとんどみられないことから、この集落はそれほど広範囲のものではなく、高位段丘部分においてのみであった可能性が高い。

古墳時代の遺構は今回の発掘調査ではみられなかったが、遺物については、確認調査のトレンチ６において６世紀中頃の土器が集中して出土したことから、集落は小規模ながらも存続していたものと思われる。また、東方約0.6kmのところに前期には日上天王山古墳、中期後葉から後期にかけては日上畝山古墳群が営まれており、これまで発見できなかった同時期の集落の存在も期待されたが、今回の調査で確認することはできなかった。

日上小深田遺跡の中心は次の奈良時代以降である。確実に時期の分かる遺構としては、Ｂ地区ＳＤ１やピット内出土のものに限られるが、Ｂ地区で検出した多数のピットや遺物包含層より出土した土器片の多くは、古代以降のものと判断できる。また、確認調査でトレンチ３より出土した瓦片は、美作国分寺や国分尼寺出土の平行タタキの平瓦に比べ条線の間隔が狭く、色調も異なるが（註１、２）、両寺存続期間中の建物の存在を示唆するものであろう。

ここでこの遺跡の中心的な遺構であるＢ地区ＳＤ１の性格について考えてみる。ＳＤ１は調査区北東側を通る道路に平行しており、規模が２ｍ前後のまっすぐな溝であることなどから、奈良時代の古道にともなう側溝の可能性があると考え、道路を隔てたところにＣ地区を設定した。その結果は「Ｃ地区の

調査」のところで述べたとおりである。溝が最も落ち込む部分（調査区の南端）におけるレベルと、対岸のＳＤ１の最も深い部分とでは約0.2mの差があり、Ｃ区南端部分で検出した落ち込みがＳＤ１と同時期のもので、かつ古道の両側にはしる２本の溝として存在していたかというとやや疑問が残る。道路部分にあたるＢ地区北東部では礫敷や護岸施設などのような遺構などはみられず、削平されたのかもしれない。現在の道路はＢ地区－Ｃ地区間に存在し、その幅は約2.6mである。しかしＳＤ１が現在の道路と平行してはしっていることは興味深い。

津山市内において古道の検出例はなく、美作国府跡の発掘調査によって検出された全長約100mにおよぶ２条の溝を道路であるとする見解があるのみである（註３）。播磨から美作にむかう古代の官道、いわゆる山陽道美作支路についてもいまだ明らかになっておらず、美作国内では英田郡家、勝間田郡家が駅家の推定地とされているのみである。勝間田郡家から美作国府にいたるまでのルートについては、現在の国道179号線を踏襲し、かつ美作国分寺の付近を迂回して加茂川を渡るという点についてはおおむね見解が一致しているものの、「美作国分寺付近」の官道については特定されず、現在の道路にその名残を求めるしかないのが現状である。これまでの説としては、国分寺跡の西方を北上し、そのまま現代の菅田橋付近で加茂川を渡るコースや（註４）、国分寺跡をさらに西走して、西方約450mのところに位置する国分尼寺跡の西側を北に折れて加茂川を渡るコースなどがあげられる（註５）。日上小深田遺跡で検出した溝が現在の道路と平行していることと、古道の側溝であることを照らし合わせると、奈良時代の地割をそのまま現在でも踏襲していることになり、遺跡の周辺域においても同様の現象がみられる可能性がある。いずれにしても今回の調査は部分的な検出であり、現時点では不明な点が多い。古道の解明のためには周辺域における調査が期待されるところである。

註

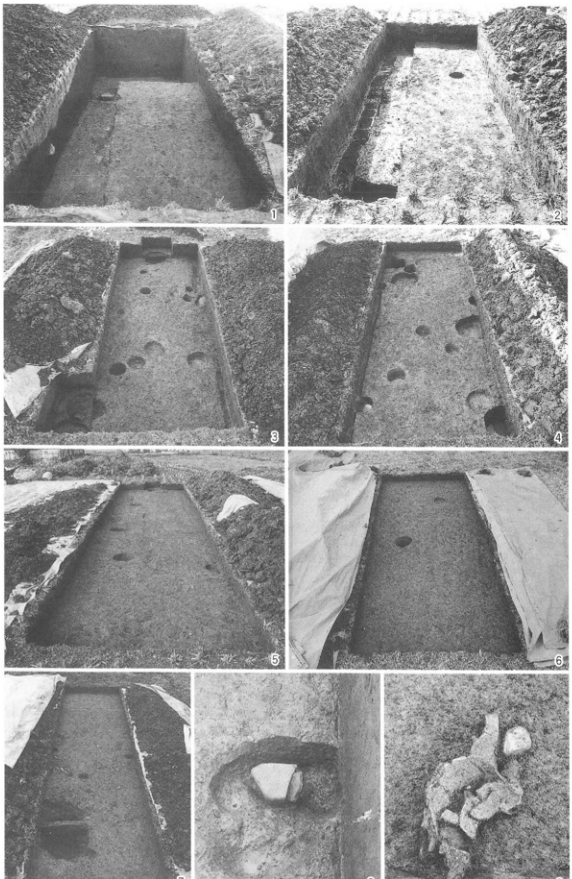
（１）湊哲夫ほか　1980　『美作国分寺跡発掘調査報告』津山市教育委員会

（２）湊哲夫　1983　『美作国分尼寺跡発掘調査報告』津山市埋蔵文化財発掘調査報告書第12集

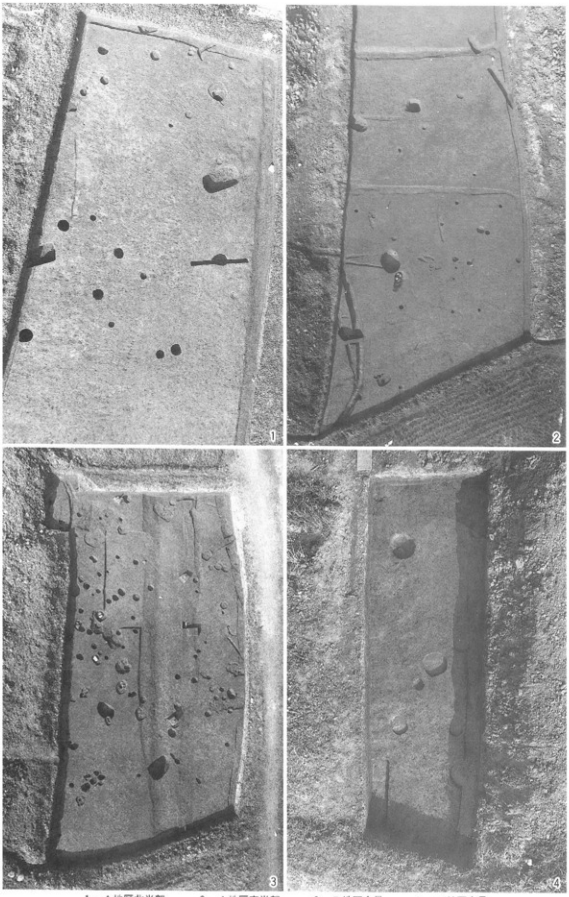
（３）岡田博　1992　「官衙」『吉備の考古学的研究』（下）山陽新聞社

（４）中村太一　1990　「山陽道美作支路の復原的研究」『歴史地理学』第150号
　また、具体的なルートについてはふれていないが、中林保　1975　「古代美作国の郡家と交通路」『人文地理』27巻４号にも勝田郡家から美作国分寺・国分尼寺付近を迂回して美作国府へ至るルートが提唱されている。

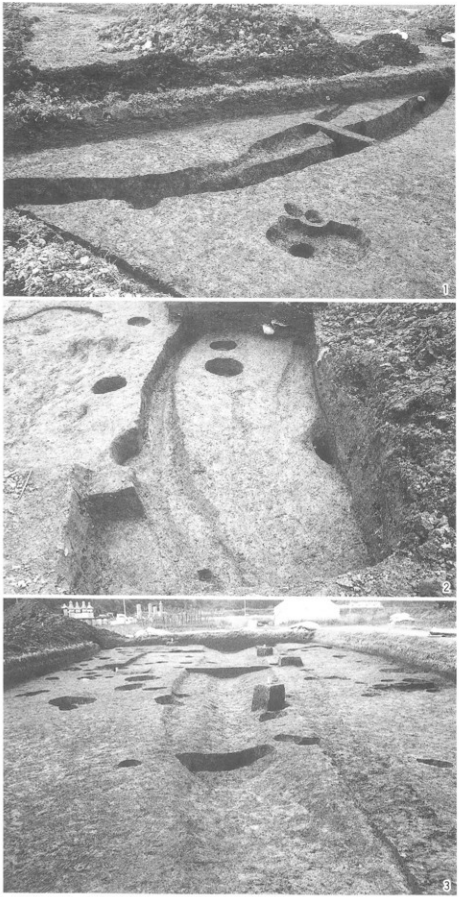
（５）湊哲夫　1992　「国分寺跡・国分尼寺跡」『吉備の考古学的研究』（下）山陽新聞社



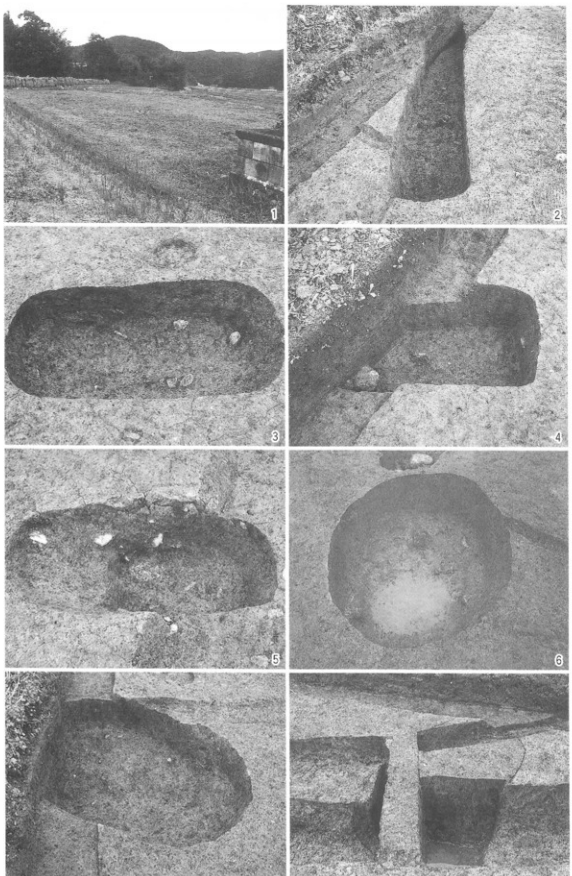
1．T－3(北から)　2．T－6(北から)　3．T－11(南から)　4．T－12(南から)　5．T－14(南から)
6．T－15(南から)　7．T－16(南から)　8．T－3平瓦出土状況(南から)　9．T－6土器出土状況(東から)



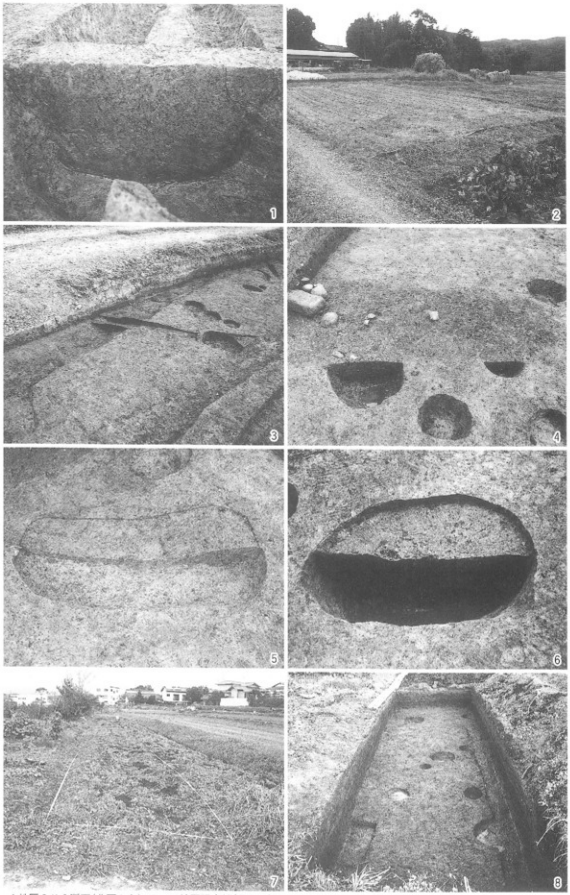
１．Ａ地区北半部　　２．Ａ地区南半部　　３．Ｂ地区全景　　４．Ｃ地区全景



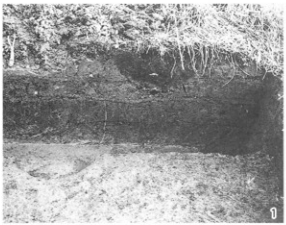
１．Ａ地区ＳＤ１・２（北東から）　２．Ｂ地区ＳＨ１（北西から）　３．Ｂ地区ＳＤ１（南東から）



1．A地区調査前（北から） 2．A地区ＳＤ３（北から） 3．A地区ＳＫ１（南東から） 4．A地区ＳＫ２（東から）
5．A地区ＳＫ３（南西から） 6．A地区ＳＫ４（北から） 7．A地区ＳＫ５（南から） 8．A地区ＳＫ６（北東から）



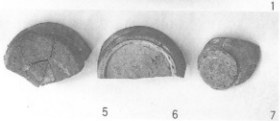
1．A地区ＳＫ6断面(北西から) 2．B地区調査前(北から) 3．B地区ＳＤ2～4付近(西から) 4．B地区ＳＫ1(北西から)
5．B地区ＳＫ3(南から) 6．B地区ＳＫ4(西から) 7．C地区調査前(南西から) 8．C地区全景(南西から)



1．C地区落ち込み部分

2．現地説明会

1


5 6 7

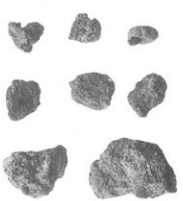
2

3

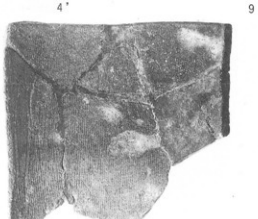
3'

4

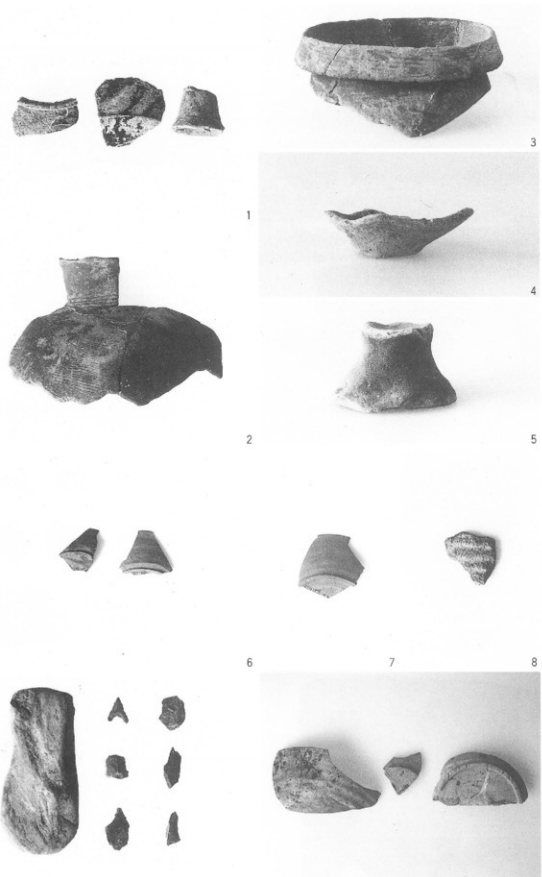
4'


9

8


8'

確認調査出土遺物



1．A地区ＳＤ２　　2～5．B地区ＳＨ１周溝　　6．B地区ＳＤ１　　7．B地区Ｐ21
8．A地区ＳＫ１　　9．B地区ＳＫ１　　10．B地区包含層
発掘調査出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ひかみこぶかたいせき
書名	日上小深田遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	津山市埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	第66集
編著者名	安川豊史・川村雪絵
編集機関	津山市教育委員会・津山弥生の里文化財センター
所在地	〒708-0824　岡山県津山市沼600-1　TEL 0868-24-8413　FAX 0868-24-8414
発行年月日	西暦2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ひかみこぶかたいせき 日上小深田遺跡	おかやまけんつやまし 岡山県津山市 ひかみ 日上1369-1他	33203		35° 2′ 47″	134° 1′ 35″	19951106 ～ 19981201	832	日上西地区土地改良総合整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡		主な遺物	特記事項
日上小深田遺跡	集落	弥生時代	竪穴住居	1	弥生土器	
			建物	1	弥生土器	
			溝	2	弥生土器	
			土坑	2	弥生土器・石鏃	
		奈良時代	溝	1	須恵器・土師器	

日上上深田遺跡

平成12年３月31日

発行　津山市教育委員会
　　津山弥生の里文化財センター
　　岡山県津山市沼600-1

印刷　株式会社　廣陽本社
　　岡山県津山市田町22